

中国三峡ダム計画の登場

——毛沢東の示唆と林一山の役割——

林 秀 光

はじめに

第一節 長江水利委員会の成立

1 林一山の長江水利委員会主任任命

2 国民政府長江水利工程総局の接収

第二節 「治江三段階」 方案になかった三峡ダム

第三節 毛沢東の示唆と林一山の計画変更

1 毛沢東の情報収集と幹部らの同行

2 毛沢東の意向と林一山の認識

第三節 「治江三段階」の改訂と鄧子恢の指示

1 林一山の指示と「留用人員」李鎮南の役割

2 「上流四つのダム」 方案と三峡ダム案

3 ダムサイト候補地の選定と三峡ダム雛形の提起

おわりに

はじめに

中国三峡ダムは一九九二年に全国人民代表大会で決定され、二〇〇九年に完成した。孫文が初めて三峡地域の開発を提起した一九一九年から九〇年の時が流れ、一九五三年に毛沢東の示唆を受けて林一山が三峡ダムを政策タスクに据えた時から数えても、約半世紀の歳月が経っていた。三峡ダムをめぐる政策過程は、前進と後退を繰

り返し紆余曲折の歴史を辿った。三峡ダムは前進と後退を繰り返しながらも決定できたのはなぜか、というのが筆者の一貫した問題関心である。

中国の政策決定に関して、中国政治は権力が集中して政策が決めやすいという「速決」の側面を強調し、手続きを踏まえて進める民主主体制下の政策決定より効率がよく優れているという議論がある。⁽¹⁾一方、オクセンバークらの研究に代表されるように、中国の政策過程は官僚組織がバーゲニングし妥協する過程であり「断片化」(Fragmented Authoritarianism)の様相を呈しているとも指摘されている。⁽²⁾

確かに、八〇年代後半から、三峡ダムは決定に向けて急転換し、中国共産党(以下、中共)政権が特定の任務を達成するために、あらゆる資源を投入し全力で取り組むその効率のよさを見せつけた。同時に、三峡ダムは決定にこぎつけられるまでに、約四〇年の歳月を要したことも看過できない。三峡ダムは、括目するほどの速さで決定できた背景に、長い歳月における「進」と「退」の攻防があつて、そのプロセスにおいてある種の決定に向けての方向性が揺れながらも定められていったと考えられる。本研究は、官僚組織と政策形成の担い手に焦点を当て、三峡ダム計画の「進」と「退」をめぐる揺れを捉えつつ、その要因および決定に持ち込む力の所在を実証的に分析する。

本研究で浮かび上がった政策形成の構造を把握した上で、中国政治の特質や政策決定のメカニズム、ひいては、中共支配の強靱さの根源について考えたい。本考察は、中国で展開された宇宙開発や高速鉄道などの大型国家プロジェクトの分析にも適用できるものと考えられる。

本稿は、三峡ダムが建国初期に登場したその源流を辿るべく、三峡ダムの推進勢力であつた長江水利委員会(以下、長委会)の動きから立案プロセスを考察する。

従来の研究または三峡ダムを論じるほとんどの著述では、三峡ダムは毛沢東によって提起されたとしている。

それは長委會主任林一山の言説によるところが大きい。林一山は再三にわたって一九五三年に長江を下る軍艦で毛沢東が三峡ダムについて言及したことを述べ、「毛主席が長江を征服する方向性を示した」、「毛沢東同志の戦略的遠見が三峡ダムプロジェクトの研究に堅固な基礎を打ち立てた」、「三峡ダムは毛沢東の偉大なる遺志である」など毛沢東のかかわりを強調し三峡ダムのある種の「正統性」をアピールしてきた。³⁾しかし、林一山自身が三峡ダム決定後に出版した著述のなかで認めているように、毛沢東は三峡ダムへの着手を指示しておらず、あくまでも示唆したにすぎなかった。そこで、毛沢東の示唆がいかに長委會の政策として成立したかは重要であるが、その「変換」のプロセスについて、従来の研究は触れてこなかったと言っている。⁴⁾

また、三峡ダムの是非をめぐる今日に至っても賛否両論が存在している。その起因に、技術面での意見分岐もさることながら、長委會がほかの官僚組織との折衝や合意はなく、最高指導者の示唆を政策に「変換」させたやり方に対する、李鋭を代表とする水力発電部門側の反発があったと思われる。そこには、三峡ダムが提起された建国初期の、水利と水力開発部門幹部の「革命」から「ガバナンス」へのパラダイム転換における考え方の違いがあったと考えられよう。

したがって本稿では、三峡ダムの政策過程の起点に立ち返り、毛沢東の示唆が世紀のプロジェクトを生むことのできたのはなぜか。つまり、長委會という水利系統の下部組織がいかにして毛沢東の示唆を自らの政策タスクとして立案したかについて、史実を整理し説明を試みたい。

第一節 長江水利委員会の成立

長委會はその主任林一山が率いるもとの、半世紀以上にわたって一貫して三峡ダムの推進勢力の一翼を担って

きた。しかし、その成り立ちについての記述が明瞭とは言いがたい。そこで、本稿では、林一山の動きや接収のプロセスについて詳述したい。

1 林一山の長江水利委员会主任任命

一九四九年一月八〜一八日、中央人民政府政務院財政經濟委員会が北京で全国各解放区水利聯席會議を開催した。この會議で流域ごとに水利機構の成立が決められ、黄河水利委員会、長江水利委員会と淮河水利工程總局の設置が決定された。この三つの流域機構は中央人民政府水利部（以下、中央水利部）の事業部門として管轄下に置かれた。二月一六日、政務院第一一次會議において、林一山が長江水利委员会主任として命じられた。長江水利委員会が設置された当時の幹部は、林一山、張彬、魏廷琿、崔吉礼、黄国慶、譚桂芝の六名のみであった。⁽⁵⁾ 林一山自身も、「長委会が成立した当時、わたしの前にある最も重要な問題は、この『司令官』しかない流域機構をいかに構築するかであった」と回顧している。⁽⁶⁾ 林一山が「司令官」しかないと言ったのにはわけがあった。というのも、張彬は林一山夫人、魏廷琿は北京で南下する直前に配属された秘書、その他三人は戦争時代から林一山の警護であった。⁽⁷⁾

林一山は中華民国が成立直前の一九一一年六月に山東省文登県で生まれた。北京師範大学歴史学部を中退し抗日戦争に投身した。国共内戦期に、彼は遼南省委書記を務めていたが、高崗とそりが合わず、その留守中に陳雲の同情と同意を得て遼南省を去った。その後、羅榮桓の紹介で人民解放軍第四野戦軍南下工作团（以下、南下工作团）に秘書長として加わった。⁽⁸⁾ 林一山は四九年八月はじめ、南下工作团とともに開封に到着し、九月下旬に人民解放軍の管制下にあった武漢に向かった。

しかし、林一山は武漢到着後に、堤防の復旧と災害救済のため、中原臨時人民政府（四九年三月開封で成立）筆

者注)の農林水利部長に命じられ、南下工作団から離れた⁽⁹⁾。彼が前述の水利聯席會議に参加したのはその時であるが、しばらくして、農林水利部は中南軍政委員会水利部に改組された。林一山は部長を務めたが、のちに民主人士である劉斐に部長の座をゆずり、党組書記兼任の副部長に収まった⁽¹⁰⁾。共産党支配の権力構造では、副部長とはいえ、党組書記を兼任しているため、部長よりも影響力を持つ場合が多い。そして、前述のとおり、林一山は同年一二月に長委会主任に任命された。

2 国民政府長江水利工程総局の接收

一九四九年一月一日に開かれた政務院第五次政務會議での決定によって「中央人民政府指導接收工作委員会華東工作団」(以下、「華東工作団」)が結成された。政務院副総理陳雲と董必武が率いるもとの、南京に向かい、国民党中央機関およびその他の重要な機関の接收を行った。「華東工作団」の結成は、中央水利部が長委会の設立を討議していた時であった。そのため、林一山は長委会の代表ではなく、中央水利部の代表として南京に赴き長江水利工程総局の接收に加わった。

南京が同年四月に解放された際に、国民政府の機関はすでに南京市軍事管制委員会によって接收されている。したがって、「華東工作団」による接收は、中央人民政府による国民政府機関の正式な接收であったということになる。

長委会元副主任である丁福五の回顧によれば、彼は四月下旬に軍事管制委員会から軍の代表として派遣され、南京で国民政府の水利部と長江水利工程総局を地下党員の協力を得て相次いで接收した。林一山も南京到着後に、丁福五と連絡をとり華東水利部(国民政府水利部を改組した組織)による長江水利工程総局の暫時的な管理と、華東水利部が長江水利工程総局の管轄を受けるなどのことを確認したと回顧している⁽¹¹⁾。

すなわち、林一山が南京に到着する前に、丁福五是軍事管制委員会の派遣によりすでに長江水利工程総局を接収しており、その数か月後に、林一山は「南下工作団」秘書長ではなく、中央水利部の代表として「華東工作団」に加わり正式に長江水利工程総局を接収したことが明らかである。

一九五〇年二月二四日に、長委会は湖北省漢口で正式に成立大会を開きスタートを切った。⁽¹²⁾ この時点で、長委会は長江水利工程総局のみならず、長江流域を管轄した上流工程局、中流工程局と下流工程局をはじめ国民政府の水利機構も接収して下部組織に収めた。また、長委会は、中南局から派遣された幹部を受け入れ、湖南省、湖北省と江西省の水利専門家や元中原大学の卒業生も吸収した。同年末には、長委会は職員総数が二六五八名に達し、本部の職員だけでも五七六名になった。⁽¹³⁾

第二節 「治江三段階」案になかった三峡ダム

長委会成立初期の主な職責は次のとおりである。すなわち、「中央水利部の指導下、長江主流と長江に直接関係する各支流または湖の水利建設事業を管轄する。下部組織として、上流、中流と下流の工程局と直属の工程処を設立する。大行政区の指導下、直接水利建設を行う」ことである。また、中心となる任務は、「洪水対策を重点とし、堤防、沿岸の排水と灌漑、暗渠と閘門の建設、遊水池の確保、同時に積極的に長江の治理計画を研究し制定する」ことである。⁽¹⁴⁾

つまり、長江の度重なる水害は、成立したばかりの長委会が直面しなければならぬ問題で、それをいかに治めるかが課題であった。林一山は主任として、「旧中国から継承できた洪水対策の『遺産』は、普通の洪水すら防衛できない堤防と机上の空論にすぎない蓄洪墾殖に関する意見だけであった」とし、「先人のやり方を踏襲し

てはならず、大所高所からものを見なくてはならないと意気込んだ」と後年に回顧している。⁽¹⁵⁾しかし、実のところ、三峡ダム計画が浮上する以前の段階において、林一山もまた長江の洪水対策に「蓄洪壅殖」を取り入れたのである。

一九五〇年、林一山が主宰し長江の洪水対策を盛り込んだ「長江水利建設五年計画大綱草案」（以下、「水利建設五か年計画」）を策定した。それは、長江沿岸の遊水池の整備、その支流漢江での丹江口ダムの建設による洪水の防御と、荆江地域の洪水を分流させる工事（分洪）が政策の柱に据えられた計画であった。⁽¹⁶⁾

続いて五一年に、林一山は「水利建設五か年計画」をもとに、長江の洪水対策である「治江三段階」論を提起した。それは具体的に次のとおりである。つまり、第一段階は、堤防の強化を中心に一九三一年型と一九四九年型洪水の制御を可能にすること。第二段階は、堤防の建設を継続しながら、「蓄洪壅殖」区域を確保し洪水を分散させること。その区域を、一九三一年型と一九四九年型洪水より規模の大きい洪水を吸収できるようにすること。第三段階は、山間部でダムを建設し、洪水の制御、発電、水路の改善と灌漑などの役割を果たし、徐々に遊水池にとって代わること。⁽¹⁷⁾

ここで重要なのは、林一山自身も認めているように、「この時点で考案した山間部でのダム建設は、長江上流地域の主流と支流、あるいは中流地域の主要支流におけるダム開発を広く指したもので、決して三峡ダムに特化したものではない」ということである。⁽¹⁸⁾

しかし、林一山はこのくだりを述べたあとに、一九五二年下半期に三峡ダムが上流工程局によって提起されたとも示唆した。すなわち、「上流工程局は林一山の『治江三段階』における山間部でのダム建設に関して、金沙江、岷江、嘉陵江と烏江の四河川（金沙江は長江上流の主流、その他三河川は長江の支流）におけるダムによる洪水対策の研究に着手した。初歩的な研究から、次のことがわかった。つまり、もしこの四河川でダムを建設しても、

その下流にある川江（四川省域内を流れる長江の主流）で起こる洪水をコントロールできず長江の中流地域の水害を防ぐことができない。同時に、中流地域自体は暴雨区であるため、（中略）、もっとも有効な方法は三峡地域でダムを造ってトータルに洪水を制御する」というものであった。⁽¹⁹⁾

中国では、年度の「下半年期」は七月から十二月を指すものであるが、林一山がこの時点で上流工程局の主張に注意を払ったかどうかは不明である。確かに言えることは、林一山がその主張を長委会の政策に組み入れていなかったことである。というのも、林一山が一九五三年二月に毛沢東に会見した際に報告したのは「治江三段階」の内容であったし、また、その会見の約二か月前に、彼が李鋭に対して語った長委会の政策構想にも三峡ダムは入っていないかった。

李鋭は燃料工業部水電工程局長に着任して早々、現状把握のために地方の関連機構を回っていた。彼は五二年一月二八日に長委会で林一山を訪ねている。李鋭の日記によると、林一山は長委会の構想を次のように語った。⁽²⁰⁾すなわち、長委会は、漢江においてまずは碾盘山ダムを建設することを決定している。第一期に五万キロワットの発電が期待でき、続いて丹江口ダムを建設する。沉水もやる用意がある。嘉陵江方案はすでに決まっており、高さ一〇〇メートルのダムになるが、戻り水が南充に達し、五〇万〜六〇万キロワットの発電ができる一方、約七〇万人の立ち退きが必要とされる。また、それぞれ規模の小さな流域にも洪水対策を目的とするダム建設が多数予定している。このように、長委会の構想に三峡ダム計画はなかったことが明らかである。

つまり、五二年下半年期において、長委会の下部組織で三峡ダムが視野に入っていた可能性があったにしても、長委会は、まだそれを自らの政策タスクとして組み入れていなかったことが明らかである。それゆえ、後述するように、林一山が毛沢東の問いに対して、「三峡ダムはまだ考えられない」と返答したのは実情に即した反応であった。とはいえ、後述するように、林一山は毛沢東が自分の胸中に秘めていた思いを言ってくれたと感激し、

毛沢東の示唆を言質に、三峡ダム計画を長委會の「第二次治江方案」に組み入れたのである。

第三節 毛沢東の示唆と林一山の計画変更

1 毛沢東の情報収集と幹部らの同行

では、毛沢東はいかに示唆したか。まず、毛沢東は建国後に初めて北京を離れ南下した目的を次のように語っている。つまり、「今年は、わが国の大規模な経済建設の一年目にあたる。(中略)。今回いくつかの省を回って、下級組織の意見を聞きたかった。それは中央が正確な決定を下すのに役に立つ」というものであった。⁽²¹⁾

現状把握という意図のもとで毛沢東は道中さまざまな下級幹部に面会した。武漢に辿り着くまでに、黄河水利委員会の黄化雲から、黄河に建設する予定の三门峡ダムの進捗状況やこの流域の水不足問題について事情聴取していた。⁽²²⁾ また、武漢での三日間の滞在中に、毛沢東は武漢市政府の幹部をはじめ、武昌区委書記から大智街の町内会長まで精力的に下級幹部と会見しそれぞれの仕事について話を聞いた。⁽²³⁾

実は、長江下りの旅も、毛沢東は乗船前日に、自ら中南局交通部党組書記兼第一副部長劉惠農に声をかけ同行を求めている。⁽²⁴⁾ その目的は、長江の港運問題、とりわけ民生輪船公私合営の状況と過程について報告を受けることであった。林一山や劉惠農のほかに、当時林一山の随行で乗船した魏廷錚の回顧によれば、中南局からは楊奇清、朱漢雄と馬克遜もこの船旅に加わっていたとある。⁽²⁵⁾ また、「長江号」が南京までの間に、江西省を通れば、その省書記楊尚奎と九江地委書記史梓銘が乗船し毛沢東に地元の状況について報告した。⁽²⁶⁾ 安徽省安慶を通過すれば、安慶地区党委員会書記傅大章と安慶市党委員会書記趙瑾山が二一日午前中に乗船し毛沢東に会っていた。⁽²⁷⁾ 毛沢東に報告するために少なからず資料を準備した傅大章に対して、毛沢東は「報告しなくてよい。なにか問題が

あれば、自由に話してみなさい」と促した。また、傅大章の回顧によれば、長江、黄河と淮河の洪水対策と開発に強い関心を寄せていた毛沢東は、以下三つのことについて話した。第一は、淮河下流の洪水のプレッシャーを軽減するために、合肥付近の將軍嶺を切り開いて、洪水季節に淮河の水を一部長江に持つてくること、第二は、黄河下流一帯は水不足の問題があるため、長江の支流丹江から黄河に水を引いてくること、第三は、長江で三峡ダムを造ることであった。このときに、毛沢東は長江の状況を詳しく知りたかったので、林一山を呼んできて、長江の流量や含砂量について聞いたと傅大章が回顧している。

このように、毛沢東に同行し会話を交わしたのは林一山だけではなかった。⁽²⁸⁾ 林一山は、一九五三年二月一九日一一時ごろに乗船し二二日夜明けまでの三日間、毛沢東とこれらの幹部とともに武漢から南京まで長江を下った。

林一山を毛沢東に引き合わせたのは、中南局党委第二書記鄧子恢であった。林一山の回顧によれば、毛沢東は武漢滞在中に鄧子恢と長江の治水について話した際に、鄧子恢が林一山を毛沢東に推薦した。⁽²⁹⁾ 林一山は中南軍政委員会水利部長を兼任していたため、軍政委員会代理主席鄧子恢のもとで五年間働いた経験があった。その間、

鄧子恢は林一山を中央組織部長饒漱石に会わせたり、林一山と関係が悪かった高崗や中南局の幹部との仲を取り持とうとしたりして林と個人的にもよい関係にあった。⁽³⁰⁾ それ以上に、当時林一山は長江を管轄する長委會の主任として、鄧子恢が率いるもつで、すでに荆江分洪工程の立案、設計と現場の指揮にかかわり頭角を現していた。⁽³¹⁾

鄧子恢が林一山を毛沢東に紹介したのは、そうした林一山の長江における業績を評価したからであったろう。林一山は鄧子恢が「毛沢東に推薦してくれたおかげで、治江に貢献でき、また毛主席と周総理の信頼を得ることができた」と自伝のなかで感謝の意を述べている。⁽³²⁾ そして、後述するように、この二人は三峡ダムを歴史の表舞台に押し出すことになる。

2 毛沢東の意向と林一山の認識

林一山は毛沢東に同行した数人の幹部の一人にすぎず、その会話も非公式な形で行われたためか、それを記録した形跡が見当たらない。というのも、毛沢東の発言は三峡ダム計画の推進に極めて有利な証拠となりうることを考えると、もし当時の記録があれば、長委會をはじめ、三峡ダム推進派は中央档案館などの機密資料を利用しそれを披露したであろう。

林一山自身も含め長江下りの旅についての記述は極めて混乱している。⁽³³⁾とはいえ、林一山は以下三つの点について一貫した内容を述べている。

第一は、毛沢東が三峡ダムについて言及したことである。林一山は「治江三段階」について報告し、第三段階において長江の主流と支流でダム建設を通して、洪水対策、発電と航道の改善など综合利用を図り、根本的に長江中流と下流の洪水問題を解決すると説明した。これを受けて、毛沢東は、「それは素晴らしい。こんなにたくさんさんのダム（の容量）を全部足しても、三峡ダムに匹敵できるか」と問うた。林一山は、「これらのダムを全部足しても、三峡ダムには匹敵できない」と答えた。毛沢東は地図上で三峡エリアを指して、「では、どうしてこの「水の」通り道をふさぐことをしないのか。これが決定的な洪水対策になる。まずは三峡ダムを造るのはどうだ」と示唆した。ここで注意したいのは、毛沢東は三峡ダムの建設を「指示」と林一山が断定していないことである。

第二は、林一山の反応である。「毛主席はわたしが長い間心に秘めていながら言い出せなかった考えを言ってくれた。毛主席は大いなる戦略家である。それゆえ、彼はこのように正確に長江の洪水とダムの相互関係を把握している。わたしは、いやわれわれは、もちろん三峡ダムの建設を強く希望している。しかし、目下はまだ考えられないと興奮気味に答えた」。これが当時の林一山の偽らない気持ちであったといえよう。

第三はもつとも重要であるが、つまり、毛沢東は自分の言葉が三峡ダム計画の指示ではなく、かつ上級組織に報告しないようにと念を押ししたのである。「長江号」が終着の南京に辿り着くころ、毛沢東は再び林一山を呼びつけた。二人が話した南水北調の問題について、直ちにやらなければならぬので、なにかがあれば手紙を寄こすようにと指示した。しかし、「三峡ダムをやるとはまだ考えていない。状況を知らなかったただだ。上級組織に報告しないように」とわざわざ念を押ししたのである。ここに、毛沢東がこの時点で三峡ダム計画の着手を指示しなかったことを、林一山は認めていることが重要である。

3 「治江三段階」の改訂と鄧子恢の指示

魏廷琿は、毛沢東が林一山に「三峡ダムの研究に着手し成果があつたら報告するように」指示したとしているが、前述したような林一山自身の回顧と異なっている。しかし、魏廷琿も同様に毛沢東が「対外的に言わないように」と林一山に念を押ししたことを認めている。⁽³⁴⁾

にもかかわらず、長江下りの旅から戻った林一山は早速そのことを鄧子恢に報告した。鄧子恢は林一山を毛沢東に紹介した前後の時期に、中共中央農村工作部（農業や水利部門を管轄する党の部門）の部長として北京に異動した。一九五四年九月、第一回全国人民代表大会が開催され、鄧子恢は周恩来の推薦で副総理になり、一月に農業、林業、水利、気象、供給と信用合作社を主管する國務院第七弁公室（以下、「七弁」）主任になった。別稿で詳述するように、鄧子恢は「七弁」主任在任中に、長委会の長江流域規劃弁公室への鞍替えによって水利部直属から國務院直属になった際の立役者でもあった。また、林一山は「長委会の重要な事項と中央に報告する必要がある事務は、しばしば『七弁』を通していたので、鄧老（鄧子恢）からは常に有力かつ時機にかなった支持を承った」と鄧子恢を介した長委会と中央権力中枢の関係を明らかにしている。⁽³⁵⁾

林一山の回顧によれば、鄧子恢の指示に従って、五三年六月に林一山が北京で「關於治江計画基本方案的報告」(以下、「第二次治江方案」)を起草した。中央にあげられたこの報告に、従来の治江構想になかった三峡ダムが盛り込まれたのである。具体的に、「長江上流の各支流にダムを建設する場合、現地にとって害を取り除く有益で総合的な価値をもつダムを除き、まずは先に主流の三峡ダムとの比較を行った上で計画を立てる」と定めた。⁽³⁶⁾ここで明らかかなように、この規定によって、長江上流のダム開発に三峡ダムが組み入れられるのみならず、その優位性も強調されたのである。

さらに、林一山は「毛沢東への報告を経て、長江の問題に注目が集まり、しばらくして、報告を再修正し補充した。それには支流(の役割)を弱め主流(の役割)を強調し、重点を浮き彫りにした。とくに三峡ダムの建設について毛主席の支持が得られるように希望する、と訴えた」⁽³⁷⁾のである。

当時、下級幹部が毛沢東の支持を取り付け、その権威を利用して政策を進めるといったようなことがしばしばあったのが次の指摘からうかがえよう。すなわち、「重大な課題については必ず自らが熟慮した上で提起する。たとえ毛主席から批准を取り付けたとしても、問題が起こったときに、結局責任は自分で取らなければならぬ」⁽³⁸⁾。ここに、毛沢東の示唆を受けて、従来の構想になかった三峡ダムを長委会の政策タスクに盛り込んだ林一山の行動様式にも、その権威を利用する意図が見え隠れする。このように、林一山の仕事への熱意や積極性は建国初期の革命幹部に共通した性質であったのかもしれない。ある意味で、それから約半世紀にわたって続けられた林一山の強い執念と行動力がなければ、三峡ダムは実現しなかったであろう。

この時点で、長委会は中央水利部、さらにその上級組織である政務院と政務院財經委員会の指導下に置かれていた。しかし、林一山は政府部門の上級組織を頭越しに、党の組織である中共中央農村工作部長鄧子恢の指示で「治江三段階」の修正を行った。⁽³⁹⁾ 実は文化大革命中に、林一山は直属の水利部や長委会所在地の湖北省ないし武

漢市の指導者が眼中に無く傲慢であるとして批判されたこともあった。⁽⁴⁰⁾ このことからわかるように、林一山は組織間の合意を取り付けつつ政策を推進することよりも、毛沢東や鄧子恢のような党部門または権力中枢の權威を借りて自らの政策を進める、いわゆる「通天ルート」(トップリーダーまで通じていること)を活用する傾向がつよい。それは林一山の秘書としてキャリアのスタートを切り、長委会主任まで上り詰めた魏廷琿もその効率の良さを指摘している。つまり、「三峡ダムプロジェクトを振り返ってみると、党中央が決心さえすれば、克服できない困難はなかった」とのことであった。⁽⁴¹⁾

そして、大型プロジェクトの獲得による組織の拡大という動機が林一山にあったように思われる。前述したように、彼が建国初期において直面したのは、「司令官」しかない流域機構をいかに構築するかという組織拡大の課題であった。のちに彼は、「早い段階で荆江分洪計画、漢江根治計画と三峡ダム計画を提起できたことは、長委会の発展にとって極めて重要であった」と、プロジェクト建設を通した部門利益の伸長を認めている。⁽⁴²⁾

第四節 長江上流工程局による三峡ダム雛形の提起

1 林一山の指示と「留用人員」李鎮南の役割

林一山は一九五三年二月に毛沢東の示唆を受け、同年六月に鄧子恢の指示で既定方針を修正したが、それを具体化させるため、九月に重慶にある上流工程局に赴いた。

林一山が上流工程局を計画実施の舞台に選んだのには二つの理由があった。一つは、前述したように、上流工程局は五二年下半期に三峡ダムの有効性を示唆した経緯があること。いま一つは、上流工程局には技術力を備えた技術者がいたこと。彼らの多くは海外留学や国民政府での勤務経験を持ち、共産党政権に残った「留用人員」

であった。

林一山は、「李鎮南、李榮夢という米国帰りの水利専門家と学者は、旧中国ではすでに名声を博していたが、実力を発揮できるプロジェクトに恵まれなかった。彼らは新中国では勤勉に働き、わたしの指示した仕事を一所懸命にやってくれた」と明らかにしている。⁽⁴³⁾ 林一山自身は北京師範大学歴史学部を中退して革命に参加したが、水利に関する専門知識を持ち合わせていなかった。彼はのちに水利に関する知識を吸収し長江を治める組織のリーダーとして三四年間も君臨したが、当時は民国時代の技術者に頼らざるを得なかったことがわかる。

李鎮南は一九三〇年代に米国への留学経験を持ち、テネシー川管理局で実習し、開拓局ではジョン・サーベジの部下として働いた。⁽⁴⁴⁾ 三八年四月に帰国し、交通大学唐山工學院の同級生黄万里（清華大学教授、三门峡ダムと三峡ダムの反対者―筆者注）の紹介で、同年一〇月に四川省水利局で職を得た。李鎮南は一年間にわたる在職中に、主に農田の水利灌漑工事の建設にかかわったと回顧している。⁽⁴⁵⁾ その間に、水利局附属の水利人員養成班や四川大学で水文と水工設計について教鞭をとることもあった。また、一九四六年夏に四川省水利工程師学会の発起人となり会長を務めた。⁽⁴⁶⁾

共産党政権下、李鎮南は五〇年五月に重慶軍事管理委員会管轄下の農田水利処に配属され、西南軍政委員会が成立後にその下部組織である西南水利部の工務処長、計画処長を務めた。西南軍政委員会の廃止に伴って、五三年五月に長委会上流工程局に主任工程師として異動した。

李鎮南は五五年初めに重慶から武漢にある長委會本部に異動し、翌年には共産党員になることを許された。⁽⁴⁷⁾ その背景に林一山による重用と抜擢があったものと推測されよう。同年六月、李鎮南が長委會副総工程師に任命され、長委會とソ連専門家のグループ長とそのグループの技術連絡係を務めた。五六年一二月長弁が「長江流域規畫要点報告」編纂委員会を発足させた際、李鎮南が主任委員になった。翌年初めに、李鎮南は総工程師として抜

擢され、長江の流域計画に関する立案を担当することになった。⁽⁴⁸⁾ その時から三峡ダムが決定されるまで、李鎮南は総工程師として三峡ダムの設計に全面的な責任を担うキーパーソンとなった。

2 「上流四つのダム」 方案と三峡ダム案

林一山は五三年九月に上流工程局に対して、長江上流の主流と支流のダムと三峡ダムについて研究の強化を求めた。具体的に、長江中流と下流の洪水対策に、長江上流の四大河川、すなわち、主流金沙江、三大支流岷江、嘉陵江と烏江で建設するダムを合わせても、三峡ダムの代わりになるかという研究課題であった。⁽⁴⁹⁾

実は、長江で洪水にもつとも弱い河段は荆江あたりである。それは、長江が険しい三峡地域を通って平原に入るが、水を吸収する洞庭湖地域にまだ辿り着かないうちに、さらに比較的規模の大きい支流の清江から流れが加わって、洪水の波の高さが高まるためである。荆江の洪水は主として長江宜昌より上流から来ている。それは、宜昌より遡って金沙江の終わりあたりまで、および北岸に位置する岷江と嘉陵江など大部分の地域は、暴雨頻発地域であることが関係している。李鎮南らは、もし、岷江、嘉陵江、金沙江および南岸の烏江からの流れをコントロールできれば、中流と下流の洪水被害の軽減につながると考えた。⁽⁵⁰⁾

彼らは実地調査を経て以下の結論に至った。すなわち、嘉陵江温塘峡は、重慶から北温泉までの一部分を除けば、この流域の洪水をコントロールできる。岷江の宜宾市郊外に位置する偏窗子は、岷江の全流域をほぼコントロールできる。金沙江のもつとも下流にある支流横江の匯口より上流一五キロメートルのところにある向家壩は、この流域九〇パーセント以上の洪水をコントロールできる。烏江武龍以下の七子背も、この流域九〇パーセントの洪水をコントロールできる、ということであった。また、この四つの支流には選択可能なダムサイトがあり、ダムの蓄水規模と洪水調整能力も備わっていることがわかった。

しかし、依然として二つの懸念が残った。第一に、水没による立ち退き問題について、流域の各省の共産党委員会の同意を取り付けなければならぬ。第二に、たとえ同意があっても、下流の宜昌までの一〇万キロ平方メートルあまりの流域で暴雨が起こった場合には、これらのダムは役割を果たせない。

李鎮南らが、カギとなる問題は後者であると考えた。つまり、荆江地域で暴雨が起こった場合に、上流のダムは役割を果たせないという見解である。したがって、彼らは、上流四つの河川のコントロールだけでは、長江中流と下流の洪水リスクを排除することが不可能であるとして、三峡ダムの建設が必要であるという結論に至ったのである。⁽⁵¹⁾

3 ダムサイト候補地の選定と三峡ダム雛形の提起

続いて、三峡ダムサイトの実地調査が行われた。上流工程局は林一山の指示に従い、五四年四月に引率を中共幹部饒興、技術責任者を李鎮南とする一〇人あまりの三峡ダムサイト査勘組を組織した。⁽⁵²⁾

彼らは、宜昌から上流へ遡って、三峡ダムのダムサイトになりうる候補地を調査した。葛洲壩、南津関、平善壩、石牌、蓮沱（南沱）、黄陵廟、三鬪坪、茅坪、太平溪、および兵書宝剑峡などがそれである。八日間に行った実地調査の結果、二つの結論が出された。一つは、サーベジの選んだ南津関というダムサイトは必ずしも最も合理的な選択ではないこと。もう一つは、蓮沱（南沱）より上流は火成岩エリアであり、それらの候補地にダムサイトを置く場合には、下流の葛洲壩エリアで補助ダムを造り、水位を調整し港運環境を改善する必要があること。

前者の理由として二つ挙げられている。第一に、南津関は石灰岩エリアに位置し、溶岩洞窟も多数見つかったということ。第二に、南津関は長江上流と中流の境目にあつて、地形は険しく上流

からの流れを堰き止めるのに適した場所である。しかし、広がりがない南津関エリアでは発電機や発電所施設、大型船が通過する建築物の配置に困難が伴う。それらの施設を地下に配置しなければならず、経済的に合理的ではない。⁽⁵³⁾

一行は重慶に戻り、李鎮南の主宰で「關於長江三峡水庫情况的簡要說明」がまとめられ長委会に報告された。⁽⁵⁴⁾ この報告は具体的に、サーベジの提案した南津関の相対化、葛洲壩ダムを補助ダムとし、その上流にある三闕坪を含めた三峡ダム候補地を提起した。この段階で、三峡ダムの雛形がすでにイメージされたことは注目に値する。

林一山はのちに、「三峡ダムを長江洪水対策のカギにする治水の思想は、多くのダムを総合的に比較した結果である」と述べた。⁽⁵⁵⁾ しかし、本稿で考察した五三年から五四年までの一連の動きからは、林一山が毛沢東との会見後に上流工程局に指示し、数か月間に三峡ダムを中心に据えるという結論に至ったことが明らかである。李鋭がいみじくも指摘したように、「三峡ダム計画について三〇年近く論争してきたが、いまだに異なる意見がある。それは、三峡ダムの提起は、まさしく優れた選択をした結果ではなく、全面的かつ確実な経済的、技術的な論証が欠落していたためである」。⁽⁵⁶⁾ とはいえ、林一山らの努力はやがて翌年の夏に起こった長江の大洪水によって最高指導部の眼に届き、ソ連からの技術者招聘を経て、国家プロジェクトとして動き出すのである。

おわりに

本稿は、林一山の率いる長委会が一九五三年二月に毛沢東の示唆を受けて、数か月の間に既定方針を変更し三峡ダムを政策タスクに組み入れたプロセスを明らかにした。具体的に、林一山は毛沢東に自らの言及を上級組織に報告しないようにと念を押されていたにもかかわらず、水利部を頭越しに鄧子恢の指示を仰ぎ、同年六月に長

委会の従来の政策を変更した。そして、現場では同年九月に上流工程局の「留用人員」であった李鎮南らが林一山の指示にしたがって実地調査を開始し、翌年四月には三峡ダムの候補地も絞られ、その雛形ができあがった。

このように、短期間で登場した三峡ダムは、「優れた選択をした結果ではなかった」と異議を申し立てた水力発電部門の李銳の指摘も一理あっただろう。にもかかわらず、三峡ダムは林一山と鄧子恢や李鎮南の連携プレーで長委会の政策タスクとして成立した。

五〇年代の中共支配の特質について次のような指摘がある。すなわち、「一九四九年における革命の勝利は、革命の到達点であり、建設の出発点でもあった。しかし、「馬の上で天下を得たこと」から「馬を下りて天下を治めること」へ転換がなされなかった。それは「革命」と「ガバナンス」の相互関係についての認識が不足していたからである。(中略)。和平時期における経済と社会の管理方式は戦時下のそれとは大きく異なっており、新しい考え方と方法を必要とする。ヒエラルキーの官僚制度は弊害を持っているが、しかし、少なくとも経済と社会政策が空想的ユートピアによって損なわれることはない。空想的ユートピア主義の主な現れの一つに、政策決定過程における随意性とロマンチズムがある⁵⁷⁾。

別稿で詳述するが、林一山の動きと前後して、水力発電部門の打ち出した長江開発の「先に支流、のちに主流」方針が全国経済を統括する中央財政委員会主任陳雲の承諾を得ていた。建国初期に「革命」から「ガバナンス」へのパラダイム転換に関する考え方の違いが両部門間で存在し、林一山の率いる長委会はヒエラルキーの官僚組織系統のなかで踏まなければならない手続きをスキップしてしまった。そのような組織の論理を超越した長委会の随意性とロマンチズムが三峡ダムの紆余曲折の歴史を紡ぐ初めの糸となった。

同時に、三峡ダムは紆余曲折の歴史を歩みながらも前進できたのはなぜかという問いに、本稿で考察した建国初期の政策過程に些かの手がかりがあったように思われる。そのような手がかりは、三峡ダムを取り巻く政治的、

経済的な環境の変化に左右されずにこの時から一貫して存在した。

一つには、下級組織とその幹部は政策の展開にあたって、トップリーダーに近い高層幹部を「パトロン」として利用したことである。このような「パトロン政治」ともいえる現象は三峡ダムをめぐる政策過程の大きな特徴の一つとなっている。それは三峡ダムを推進する勢力だけでなく、反対する人たちも利用した一つのツールであった。別稿で詳述するように、三峡ダムの政策過程において、李先念、王任重、王震、陳雲などが推進と反対の意見を代弁する形で「パトロン」となった。ちなみに、この時期にパトロンとなった鄧子恢は、毛沢東の急進的な農業合作化政策に異議を唱えたため、「小脚女人」(纏足の女性)と批判されるのに失脚した。しかし、このような保守的なイメージを持つ鄧子恢でさえも、大型ダムである三門峡ダムや三峡ダムの決定過程においてはむしろ「急進」的な姿勢でかかわっていた。

いま一つは、長委会の三峡ダムを推進する人的な要因である。林一山自身の強い執着心やロマンチズムもさることながら、長委会は国民政府の水利系統を接収しスタートを切ったが、林一山が李鎮南のような「留用人員」を活用したように、技術者の重用によって組織の底力をつくったと考えられる。一九五六年末には、長委会の職員が八三二五人に増加し、そのなかで工程師が三六七人を数えた。⁽⁵⁸⁾また、キーパーソン林一山をはじめ、李鎮南や魏廷琿のような技術者と職員の多くは、建国初期から長委会に所属しその後も異動はなく、キャリアそのものが三峡ダムと深く結びづいていた。⁽⁵⁹⁾ある意味で、三峡ダムは彼らにとってキャリアと人生そのものであったといっても過言ではない。魏廷琿がいみじくも明言したように、「数十年にわたって長弁と長江にかかわってきたが、わたしの主な仕事は、三峡ダムを実現させることであつた」⁽⁶⁰⁾。三峡ダムの実現は、キーパーソンに限らず、六名で出発した長委会の組織としての念願でもあつたように思われる。

- (1) 王昭光、樊鵬著『中国式共識型決策——「開門」与「磨合」』中国人民大学出版社、二〇一三年。また、鄧小平は次のように述べている。「社会主義国家には最大の優位性がある。つまり一事を行うにあたり、ひとたび心を決め、ひとたび決議すれば即刻執行して影響を受けないということである」。「改革的歩子要加快（一九八七年六月二日）」『鄧小平文選』第三卷、二四〇頁、人民出版社、一九九三年。
- (2) Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg: *Policy-Making in China: Leaders, Structures and Processes*, Princeton: Princeton University Press, 1988.
- (3) 林一山「毛主席指明了征服長江的方向」『人民日報』一九七八年二月二三日。林一山「震撼歷史的抉抉」湖北省政協文史資料委員會、宜昌市政協學習文史委員會編『三峡文史博覽』第一輯、三八頁、中国文史出版社、一九九七年。または、林一山「關於三峡水庫移民問題的報告——李副總理並國務院、一九七八年一月二十六日」楊世華編『林一山治水文選』三七五～三八〇頁、新華出版社、一九九二年。
- (4) "The Three Gorges Dam Project", Lieberthal and Oksenberg: *Policy-Making in China: Leaders, Structures and Processes*, p. 269-338. 蘇向榮著『三峡決策論弁——政策論弁的價值探尋』中央編訳出版社、二〇〇七年。王維洛著『三峡工程三六計』博大出版、二〇〇九年。また、李銳を含む三峡ダム反対論陣の著述にも言及が見られない。
- (5) 中華人民共和国水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九～二〇〇〇年）』七三頁、中国水利電出版社、二〇〇三年。
- (6) 『林一山回憶錄』一三三頁、方志出版社、二〇〇四年。
- (7) 崔吉礼「我為林政委當警衛員」林一山治江思想研究会編『林一山治水生涯漫憶』二七九～二八四頁、長江出版社、二〇一一年。
- (8) 前掲、『林一山回憶錄』一二四～一二五頁。林一山初期のキャリアについて言及するあらゆる文献にこの記述があるため、詳しい列挙を割愛する。
- (9) 同右、『林一山回憶錄』一三三頁。
- (10) 同右、『林一山回憶錄』一三〇頁。林一山は中南軍政委員會水利部党組書記でもあった。出所：長江水利委員會「一山独秀林不老 大江浩蕩水長流 沈痛悼念長江水利委員會原主任林一山同志」『人民長江』第三九卷第三期、二〇

〇八年二月号。

- (11) 丁福五「長江水利委員會的創設者林一山—為記念長江水利委員會成立六〇周年而作」前掲、『林一山治水生涯漫憶』六〇〜六四頁。または、同右、『林一山回憶録』一三四頁。
- (12) 前掲、『新中国水利(水電)系統組織沿革(一九四九〜二〇〇〇年)』七三頁。多くの文献は林一山が接収したのは、揚子江水利委員会としているが、下記の国民政府時代に長江流域に設置した水利機構の変遷から判断して、長江水利工程総局が正しい。揚子江水道討論委員会(一九二一年二月〜二八年五月) ↓揚子江水道整理委員会(一九二八年五月〜三五年四月) ↓揚子江水利委員会(一九三五年四月〜四六年五月) ↓長江水利工程総局(一九四六年五月〜四九年一〇月)。出所:『新中国水利(水電)系統組織沿革(一九四九年〜二〇〇〇年)』七一頁。
- (13) 同右、『新中国水利(水電)系統組織沿革(一九四九〜二〇〇〇年)』七三頁。
- (14) 同右。
- (15) 林一山主編『高峽出平湖—長江三峽工程』一四八頁、二六〜二七頁、中国青年出版社、一九九四年。「蓄洪懇殖」とは次の意味である。すなわち、計画的に長江兩岸の一部の湖や低地を堤防で囲み、必要に応じて洪水が入りできる暗渠や排水路、または水門をつくる。降水量が大きくない年には、低地周囲の土手と堤防の内側の土地を利用して耕作し農業を発展させる。もし特大洪水が発生し、主流の堤防がその限界を超えた場合、これらのエリアに洪水を誘導し、長江主流と支流の水位を下げる。局所的な利益を犠牲にして広範囲の農田と重要都市の安全を守る目的を果たす。出所:前掲、『林一山回憶録』一五七頁。
- (16) 同右、『高峽出平湖—長江三峽工程』一四八頁、二六頁、一四八頁。または、『中国三峽建設年鑑一九九四年』二六二頁、中国三峽出版社、一九九五年。
- (17) 同右、『高峽出平湖—長江三峽工程』一四八頁、二六〜二七頁。また、前掲、『林一山回憶録』一九三〜一九四頁。一九五一年一二月に書かれた次の林一山の文章も同様の趣旨であった。前掲、「两年来治江研究工作的發展」『林一山治水文選』一九五〜二〇六頁。
- (18) 同右、『高峽出平湖—長江三峽工程』二六頁。
- (19) 同右、『高峽出平湖—長江三峽工程』二七頁。

- (20) 李銳著『李銳往事雜憶』一四四～一四五頁、江蘇人民出版社、一九九五年。本書に収めている「転業前後の日記」は一九五二年六月一日から一九五四年七月一日まで、水電工程局に着任した経緯とソ連訪問までの出来事を記している。
- (21) 中共中央文献研究室『毛沢東年譜一九四九—一九七六年』第二卷、三五頁、中央文献出版社、二〇一三年。
- (22) 拙稿「中国の政策過程と三門峡ダム」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第八二巻第六号、二〇〇九年六月。
- (23) 王任重「毛沢東同志第一次視察武漢」中共湖北省委党史資料徵編委員會編『毛沢東在湖北』一～四頁、中共党史出版社、一九九三年。
- (24) 劉惠農「溫馨的回憶—紀念毛沢東同志一〇〇周年誕辰」劉繼增、毛磊、袁繼成編『毛沢東在湖北』二七四～二七五頁、湖北人民出版社、一九九三年。
- (25) 魏廷琿「也談毛沢東為海軍題詞」『百年潮』二〇〇九年五月号。
- (26) 同右、「也談毛沢東為海軍題詞」。
- (27) 傅大章「毛主席和我的第一次談話」中共安徽省委党史工作委員會編『毛沢東在安徽』一四五～一四九頁、安徽人民出版社、一九九三年。
- (28) 毛沢東に同行したのは林一山のみであり、二人はその道中長い時間をかけて話し合ったような印象を与える記述が多くある。例えば、盧江林、張世黎、成綏台著『風流峡谷—中国長江三峡工程』一六～二六頁、中国青年出版社、一九九三年。前掲、『高峡出平湖—長江三峡工程』二七～三六頁。
- (29) 林一山「充滿革命情誼的好領導」『回憶鄧子恢』編輯委員會編『回憶鄧子恢』二九五頁、人民出版社、一九九六年。または、同右、『風流峡谷—中国長江三峡工程』一七頁。
- (30) 前掲、『林一山回憶錄』一四六～一五〇頁。または、同右、林一山「充滿革命情誼的好領導」二九五頁。
- (31) 同右、『林一山回憶錄』一四〇～一四五頁。
- (32) 同右、『林一山回憶錄』一四九頁。
- (33) 林一山と毛沢東が三峡ダムについて語った期日について、当時乗船していた林一山自身、傅大章と魏廷琿によるものと『毛沢東年譜』の記述がある。傅大章は二月二日に毛沢東に報告していたときに林一山も呼ばれて同席し、

- その際に毛沢東は三峡ダムについて言及したと回顧している。しかし、林一山自身の記述に一貫性はなく、二月九日、二〇日、二一日と二二日のどの日も毛沢東に会っていたような書き方であるが、三峡ダムについて語ったのは二一日とする記述が多い。魏廷琿の回顧も曖昧で、具体的な日付を示しているのは一九日のみであり、この日に三峡ダムについて語ったとしている。一方、『毛沢東年譜』では、毛沢東が三峡ダムについて言及したのは二〇日となっている。出所…『長江』艦上見毛沢東『林一山治水文選』一〇六頁、『毛沢東胸中的長江』『毛沢東在湖北』七六〇九八頁(その第一節『長江』艦上見毛沢東)は『林一山治水文選』と同じ内容である。『高峡出平湖—長江三峡工程』二七〇三六頁、『風流峡谷—中国長江三峡工程』二二〇二六頁、『林一山回憶錄』一五一〇一六二頁、魏廷琿『治江工作的先驅—悼念林一山同志』『林一山治水生涯漫憶』九〇一頁、『毛沢東年譜一九四九—一九七六』三三〇三七頁。
- (34) 魏廷琿「長江三峡工程的決策」高水中主編『中国共産党口述史料叢書』第二卷、二四頁、中共党史出版社、二〇一三年。
- (35) 前掲、『林一山回憶錄』一五〇頁。
- (36) 前掲、『中国三峡建設年鑑一九九四年』二六二頁。または、同右、『林一山回憶錄』一九四頁。
- (37) 同右、『林一山回憶錄』一九四頁。
- (38) 李銳が陳雲の秘書周太和に戒められた言葉として日記に書き留めた。前掲、「転業前後日記」『李銳往事雜憶』一九三頁。
- (39) 中央人民政府水利部は五四年に中華人民共和国水利部に名称が変更され、国務院と国務院第七弁公室の指導下に入った。前掲、『新中国水利(水電)系統組織沿革(一九四九—二〇〇〇年)』三〇四頁。
- (40) 顧建堂著『生逢其時—文化大革命親歷記』第八節「我写了一张转向大字报」『六〇年代』ホームページ <http://60nd.org/Index.asp>、二〇一五年一月一日アクセス。
- (41) 魏廷琿「我参与三峡工程論証的經過」、前掲、『三峡文史博覽』第一輯、六〇頁。
- (42) 前掲、『林一山回憶錄』一三三〇一三九頁。このくだりは、林一山が「治江三段階」との関連で述べているが、本稿で考察したように、「治江三段階」ではまだ三峡ダム計画が登場していなかった。
- (43) 同右、『林一山回憶錄』一九四頁。

- (44) ジョン・サーベジと三峡ダムのかかわりについて、拙稿を参照されたい。「一九四〇年代における中国三峡ダム開発—国民政府の国家建設と米中経済・技術協力」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第八九卷第三号、二〇一六年三月号。
- (45) 李鎮南著『治江側記』一六頁、中国水利水電出版社、一九九七年。
- (46) 熊達成「四川省水利工程師学会の成立和活動情況」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料委員會編『文史資料存稿選編（經濟）』下、一〇〇〇～一〇〇一頁、中国文史出版社、二〇〇二年。
- (47) 前掲、『治江側記』二五七頁。
- (48) 同右、『治江側記』三八頁。
- (49) 同右、『治江側記』二九頁。または、前掲、『林一山回憶錄』一九四頁。
- (50) 同右、『治江側記』三〇頁。
- (51) 同右、『治江側記』三一頁。
- (52) 同右、『治江側記』三一～三七頁。または、前掲、魏廷璋「長江三峡工程的決策」『中国共産党口述史料叢書』第二卷、二四頁。
- (53) 同右、『治江側記』三一～三七頁。
- (54) 同右、『治江側記』三七頁。一方、前掲、『三峡建設年鑑一九九四』二六三頁には次の記述がある。すなわち、「約一か月にわたる調査の結果、彼らは三闞坪、茅坪などを含む黄陵廟エリアがダムサイトにもっとも適しているとの結論を出し、「關於長江三峡水庫情況的簡要說明」をまとめた。この記述の原典は示されていないが、当事者である李鎮南の回顧録がより信ぴょう性があると思われる。
- (55) 前掲、『高峡出平湖—長江三峡工程』二六～二七頁。
- (56) 李銳著『論三峡工程』一六八頁、湖南科学技术出版社、一九八五年。
- (57) 高華著「叙事視角の多様性と当代史研究…以五〇年代歴史記述為例」『革命年代』二九七頁、広東人民出版社、二〇一〇年。
- (58) 前掲、『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九～二〇〇〇年）』七五頁。

(59) 三峡ダムの政策形成過程に技術者あるいは宣伝部門で三峡ダムを宣伝する書き手としてしばしば登場した楊賢溢、文伏波、曹樂安、成綏台なども、長委会が成立した直後から在職した。

(60) 前掲、魏廷琿「我参与三峡工程論証的經過」『三峡文史博覽』第一輯、六一頁。ここでいう「長弁」は長江流域
規劃弁公室の略称で、一九五六年一〇月に長委会から改組された。